

人文学部長が語る

コロナ禍で問われる大学の学び



松本 俊穂(まつもととしお)

北海道出身。専門分野は音楽教育、教会オルガン。オルフの音楽教育、音楽教育における教会法による音楽表現、典礼聖歌のオルガン伴奏におけるintonationの在り方を研究テーマとしている。

オンライン授業から見えてくる大学の本当の姿とは

大学を取り巻く状況

新型コロナウイルスによる感染症が世界を覆い始めてから1年が過ぎました。大学も困難を強いられ、多くの大学は相次いで閉鎖され、オンライン授業に慌ただしく切り替わってまいりました。新しく入学した学生たちはキャンパスに入らず、数ヶ月間、大学によっては半年以上も足を踏み入れることもできない状況が続いたのです。

時に感染者のクラスターが発生した大学は社会から激しいバッシングにさらされ、学生もアルバイト先から解雇されるなど、このウィルスの勢いはとどまることを知りません。3密(密閉・密集・密接)を避けて暮らすことを余儀なくされ、人間が社会を作る上で欠かせない、移動する、集まる、対話するという三つの自由が大きく制限されてしまうほど、パンデミックは私たちの生活に大きな脅威をもたらしたのです。

しかしそのような中で、見えなかったものが見えてきました。

オンライン授業を経験して

大学でオンライン授業を余儀なくさ

れる中、対面型授業がいかにも有り難く、優れているか、学生同士の会話やたわいないふれ合いがいかにも大切なものかを思い知らされたように思います。また一方では、対話する自由においては、むしろオンラインで多くの人とつながることを新しい対話の道が開かれ、空間や時間を飛び越えるメリットも見えてきたのも事実です。これまで移動や時間に費やした多大な労力を考えると、オンラインでの会議、そして授業は大変効率的でもあり、また人と顔を合わせなければならぬというストレスからも解放され、精神的にも時間的にも自由になったと感じる人も多いのではないのでしょうか。

本学ではIRという機関でオンライン授業についての調査を学生と教員に対して行ってきました。調査から浮かび上がってきた事があります。メリットとしては、「人と接することなく安心して授業を受けることができた」「教師の目や周りの目をあまり気にしなくて済むので、リラックスして講義に臨めた」と人と接することなく集中して授業に臨めたといった意見です。一方、「コミュニケーションがとりづらい」「質問したくてもしづらい」「集団の空気が捉えにくい」「友達と確認できない」「友達と会う機会が少ない」「先生とのすれ違いが多々あった」「先生の表情がわかりにくい」等々、相手と関われないもどかしさを訴える意見もありました。

「大学の学び」とは

大学によっては半年以上もキャンパス

に足を運ばず、ひたすら画面を通してのオンライン授業をこなす、あたかも授業のコンテンツをインストールするかのような状況をどのように捉えたらよいのでしょうか。そもそも大学とは何なのかという疑問さえ覚えてしまいます。

ここ数十年、大学は文部科学省や社会からの強い要請により「学生にしっかりと勉強させること」に取り組んできたと言えます。国は1990年代以降、大学を大きく改革する事に着手し、それまで事細かに規制されていた教育カリキュラムを、各大学が自主的に決定できるようにする一方、カリキュラムやシラバスを整備させ、授業内容を詳細に定めることを求めてきました。学生をカリキュラム通りにきっちり勉強させる仕組みを強化すれば、学生の学力は向上するだろうと考えたのです。しかし2010年代に明らかになってきたのは、日本の大学の教育研究水準の停滞です。大学生の学力低下への批判はやむことがなく、大学の教育や研究能力は低下してしまつたと叫ばれているのです。なぜそのような事が起こってしまったのでしょうか。

大阪市立大学の増田聡教授は、「大学の学びがコンテンツ化し、何かのために必要な知識は、どこかにコンテンツとして存在しており、必要ならそれを見つけてアクセスしさえすればいいという感覚が、学生や社会に浸透してしまつたのではないか」と言っています(内田樹編『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』晶文社)。つまり大学での学びをコンテンツとしてと

らえ、学費を払つた分に見合うだけの知識や能力が得られる場として、「知」を商品のように取引するような場へと大学は変化させられてきたのではないかということなのです。

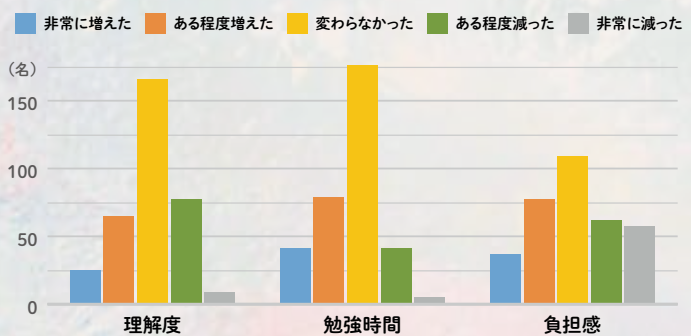
大学の本当の姿

大学教育は単にコンテンツをインストールするところではありません。それが皮肉なことに、コロナ禍によって大学に通えなくなり、「オンライン授業はうんざり」はやく友達と一緒にいさせて」と声をあげる学生たちこそが、そのことに気づきつつあるのかもしれない。

オンライン授業のかたちで行われているコロナ禍の大学の状況は、「きっちり勉強させる」大学です。授業の間の移動時間、友人との雑談やサークル活動の無い、純粋なコンテンツのインストールの授業に学生たちは次第に不満を漏らしてきているのだと思います。新型コロナウイルスが大学にもたらしたメリットがもしあつたとするならば、ただオンラインで勉強だけすることが「大学の学び」ではない、ということに学生たちが気づいたことかもしれません。

コロナ禍を乗り越えるためのパッケージされたコンテンツを私たちはまだ知りません。つまり私たちは答えのない、解決するコンテンツのないものを必死に考え、問題を解決するための道筋を探さなくてはならないのです。だれも教えてくれない、コンテンツのない事に向かう姿こそ大学の本当の姿なのかもしれません。

対面での授業と比べて、「オンライン授業」はいかがでしたか。



<参考>

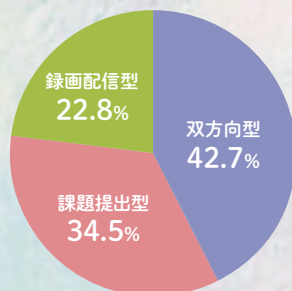
オンライン授業アンケート結果

(学生対象)

調査方法: Googleフォームによる回答(無記名)
 実施日: 2020年9月4日(金)~6日(日)
 対象数: 1,161名(学部1,141名、大学院20名)
 回答数: 449名[回答率38.7%]

あなたが、一番受けやすいと感じたオンライン授業の形式を選択してください。

- 双方向型
Google Meetなどを利用した双方向にやり取りするリアルタイムな授業
- 録画配信型
録画配信を視聴し、質問や課題を提出する授業
- 課題提出型
Google Classroomやメールで示された授業の内容と課題に対し、質問や課題を提出する授業



新型コロナウイルス収束後もオンライン授業を受けたいと思いますか。

